

パーキンソン病や歩行障害

パーキンソン病は手足のふるえ（振戦）・手足のこわばり（固縮）・動作が緩慢・不器用になる・転びやすくなる（姿勢反射障害）、が特徴的な病気です。

主に 40 歳から 50 歳以降に発症し、ゆっくりと進行する原因不明の神経変性疾患です。日本での有病率は人口 1,000 人当たりに約一人と言われており実はそれほど珍しい病気ではありません。

症状がゆっくり進行する為に単に老化と考えて放置されていることや別の病気と考えられている場合もあります。また似てことなるパーキンソン症候群（脳梗塞・正常圧水頭症・多系統萎縮症や進行性核上性麻痺などの変性疾患）や他の治療薬の副作用による薬剤性パーキンソン症候群として生じる場合もあります。

最近転倒しやすくなった、動作が不器用になった、手足がふるえるといったことが気になっていたり、あるいはそれで頭の MRI をチェックして欲しいなどの希望があればご相談ください。

片頭痛

有名な病気・疾患ですが、当事者は「こんなもんだ」「自分の月経前症候群が強い方だ」として市販の鎮痛剤だけ服用してそのままになっていることも多いようです。片頭痛として治療をはじめると頭痛への対処がずいぶん楽になった、頭痛が起こりにくくなって快適になったということが時々あります。

「一旦頭痛が生じるとどうしようもなく寝込む」「低気圧の時は頭が痛いことが多い」「緑茶を飲むと必ず激しい頭痛が生じる」「お酒を飲むと頭痛がきついたので飲まない」といった方は片頭痛の可能性もあると思いますのでご相談をおすすめいたします。

モノ忘れ・認知症

加齢による「もの忘れ」と、アルツハイマー病などで見られる「もの忘れ」には違いがあることがあります。例えば普通のモノ忘れでは、「昨日何を食べたか思い出せない」ことはあっても「食事をしたこと」は覚えています。アルツハイマー病では「食事をしたこと」自体を忘れてしまったりします。

最近では初期のアルツハイマー病の進行を食い止める点滴薬（レケンビ®やケサ

ンラ®)が開発されています。必要あれば武田病院などに検査の紹介をさせていただきます。

残念ながら病気が進んでしまうとそのままでは生活が成り立たなくなってくることも多々ありますので病状を見て主治医意見書などを適切に用意して介護保険をうまく使っていくことが大事になってくるように思われます。

脳卒中後

脳梗塞・脳出血後は特に血圧や糖尿病や高脂血症の治療継続が必要なことが多いです。また後遺症としての痛みやツッパリ感の対症療法が望ましいことが多いです。脳卒中後の痙縮についてのボツリヌス注射療法を積極的に行っております。